

相模女子大学紀要 第八四号（二〇二〇年度）

イアン・ハツキング『表現と介入』を（文学的に）読む

風間誠史

二〇二二年三月二日 発行

イアン・ハッキング『表現と介入』を（文学的に）読む

風間 誠史

一 はじめに、もしくは、はじまり

イアン・ハッキング（一九三六〜）という人は、科学哲学の世界では有名ならしい（「英米哲学におけるフーコー」と呼ばれているそう）。そして『表現と介入 科学哲学入門』（一九八三）という本もまた、定評のある名著らしい。

そうしたことを全く知らずに、私は書店の文庫本のコーナーでこの本の背表紙と出会い、購入して、読んだ。何とも酔狂なことである。私は文学研究者なので、タイトルの「表現」という語に興味を持ったのである。こういう、本の流通という文化（名著が一般読者向けに文庫化されて、書店の棚に並ぶこと）は、それによつていまの「私」がある、私によつて疑いようのない最善の「環境」であり、だから多分それが私の限界だろう。この（いま書いている）文章は、そういうわけで、「私の限界」の話である。

最初に強い印象を持ったのは、タイトルの「表現」の原語が「Representing」だということだった。新鮮だった。私は「表現」は「Expression」だと思つていたのである。私が文学研究の道に入った当時、最も影響を受けた著作のひとつは吉本隆明の『言語にとつて美とは何か』だったが、そこに示された「表現理論」は、言語表現は「自己表出」と「指示表出」から成るといふものだった。これは時枝文法の「詞辞」説から来ているわけだが、「自己表出」の「表出」というのは、どう考えても

「Representing」ではなく「Expression」だろう。いまあらためて考えると、だとすれば「指示表出」というのは矛盾した言い方もしくは意味不明のように感じるが、当時はそんなことは全く気にならなかった。「表現」は「表出 (Expression)」だと思つていなかったのである。

「表現」が「Representing」であるというのは、そういうわけで私にとつて「ユリイカ」だった。ちょうどそのころ、私は自分の論文をまとめた本を出版しようとしていて、そのあとがきに、こんなことを書いていた（『近世小説を批評する』二〇一八 森話社）。

いまは「表現」リプレゼンテーション」ということを考えている。言語学的転回以後、言語以前は「ない」というのが常識で、私もそうだとと思うのだが、しかし言語は何かを「リ・プレゼンテーション（再現）」しているから「伝わる」のではないだろうか。言語以前とは何か。それはクオリア（と呼ぶべきもの）なのか、アイデア（としか呼びようのないもの）なのか、あるいは言語以前にはやはり言語があるのか……。

これは、そういうわけで『表現と介入』の影響を受けての文章なのだが、実のところほとんど『表現と介入』の内容を理解していない。『表現と介入』が述べているのは、まず「表現」があり、言語はその後でやって来るということ。「クオリア」とか「アイデア」はさらにその後に来る（言語によつて語られ構築される）。

これはしかし難解な議論で、一読して理解できないのは当然だろう（と自己弁護しておく）。その後あらためて『表現と介入』を自分なりに精読して見えてきたことが多く、そのプロセスを詳細に「表現」しようというのが、本稿の目的である。まったく個人的な動機で、それが文学研究に何をもたらすのか、何ももたらさないのか、確信はないが、ともあれ書き進めてみたい。

二 概要

イアン・ハッキング『表現と介入 科学哲学入門』の概要を説明する。イアン・ハッキングはカナダの人で、「現代を代表する科学哲学者」（文庫版のカバー裏著者紹介）。『表現と介入』は一九八三年に出版されたが、著者の「前書き」によれば、本書の内容は、大学での科学哲学の入門コースで扱う「トピック」であるという。副題に「科学哲学入門」とあるのはそういうことらしい。

日本語訳は渡辺博（もちろん私は全く知らない）。一九八六年に産業図書より刊行され、二〇一五年にちくま学芸文庫の一冊として再刊された。先述の通り、私はそこで本書に出会うことができた。ちなみに「訳者あとがき」によれば、

一九八三年の暮に神田の東京堂で偶然に原著を見つけ、立ち読みをし
ているうちに訳したくなった：

そうで、

世に出て間もない本、わが国ではほとんど名も知られていない哲学者
の本を翻訳してみたいという風変わりな希望：

が編集者に受け入れられて翻訳・出版に至ったのだという。そしてそれが
文庫本になった。こういう「文化」が「私」を成り立たせる「環境」なの
である。それを「奇跡」と呼んでもあながち的外れではないだろう。私が
本書に出会ったことまでを含め。

本書の内容だが、とりあえず目次を掲げる。

謝辞／内容目次／前書き

序論 — 合理性

第1部 表現すること

第1章 科学的事実論とは何か／ 第2章 基礎単位となることと原因
となること／ 第3章 実証主義／ 第4章 プラグマティズム／ 第
5章 共約不可能性／ 第6章 指示／ 第7章 内在的事実論／ 第
8章 真理の代用となるもの

小休止 本物と表現

第2部 介入すること

第9章 実験／ 第10章 観察／ 第11章 顕微鏡／ 第12章 思弁、
計算、モデル、近似／ 第13章 現象の創造／ 第14章 測定／ 第15
章 ベーコンの主題／ 第16章 実験活動と科学的事実論

注／文献案内

最初（「謝辞」の次）に「内容目次」として各章の概要を五行から十行
程度にまとめてくれており、末尾の「文献案内」ともども、実に親切で行
き届いた「科学哲学入門」書の体裁である。もともと中身は、専門論文へ
の論究あり、広範な哲学への言及あり、アイロニーに満ちた言い回しあり
で、「わかりやすい」本ではない。読者を刺激することで「入門」へと誘
う種類の入門書である。

そして、前半8章が「表現すること」後半8章が「介入すること」と、
シンメトリカルに構成されている。「表現」というのは科学的な「理論」
のことであり、「介入」は同じく「実験」のこと、と言ってほぼ間違いな
い。「科学」の両輪である。「前書き」に「トピック」とあったように、各
章はそれぞれ独立した話題、テーマを扱いながら、ゆるやかにつながって
おり、全体のテーマは第1章と第16章に出てくる「科学的事実論」という
ことになる。「科学的事実論」とは、電子のような、科学で扱われる直接
目で見たり触ったりできない対象が、「実在」するのか、理論的なもの
（つまり架空の概念であり「非実在」）なのかという議論、論争のこと。

そういう議論がある、ということが門外漢の私には大変興味深い。

ちくま学芸文庫には「訳者あとがき」の他に「解説」（戸田山和久）があり、「本書の内容はたった二つの文章に要約でき」と述べている。その二つとは、

（1）あなたが電子を吹きかけるならば、それは実在する（六四頁）

（2）実験活動はそれ自身の生活をもっている（二九五頁）

だという。（1）は第一部第一章、（2）は第二部最初の第9章にあって、後者はもちろん「実験」という「介入」のことを言っているわけだが、（1）の「電子を吹きかける」というのも、「実験」「介入」のことである。つまりこの解説によると、本書は、

：実験という活動を中心に据えて、科学哲学上の問題を考えていこうという新しい流れを生み出した。

のであり、「実験」「介入」の議論が画期的だったらしい。解説の最後には、科学についての研究のボーダーレス化の引き金をひいたという点でも、やっぱり『表現と介入』はスゴイ本だよな、と思う。

と記されていて、門外漢ながらなるほどと思うし、この本がその分野（科学哲学）にもたらした議論の豊かさも、何となく想像できる気がする。実際、門外漢にも十分に面白い（特に「介入」の部分が）。「名著」とはそういうものなのだろう。

さてしかし、私がこの本を手にとったのは「表現」について何かを得られるかもしれないと思ったからで、そして「Representing」にまずは「発見」があった。私の興味はひきつづき「介入」ではなくて「表現」の方にある。この本は「表現」を考える立場から読んで、十分に「スゴイ本だよな」と思うので、そのことを記してみたいのである。そして、そういう立場から読むと、本書の内容は一文に「要約」できると思う。次の一文に。

人間存在は表現するものである（二六四頁）

三 要約

「表現」の側から『表現と介入』を読むとき、何ととっても興味深いのは第一部と第二部の間に「小休止」として置かれた「本物と表現」という章である。著者によればこの章が本書のなかで最初に書かれたものだという（「謝辞」の末尾）。そして同じく著者の「内容目次」には、それは「人類学的空想物語」であり「寓話」であると記されている。つまり通常の科学哲学の議論ではない、そこからはみだしたものの、ということだろう。だから「小休止」。しかしそれは同時に「表現」と「介入」の間に置かれ、「表現」についてのまとめであり、「介入」の序論であり、両者をつなぐハブなのである。「空想物語」や「寓話」でなければ語りえないものを、ここで著者は語っているらしい。

というわけで、実は本稿は、ほぼ「小休止 本物と表現」を読むことに限定される。しかしそれは、私の考えでは（あるいは私にとっては）この本全体を読むこととほぼ等価なのである（もちろん、この章だけ読めばいいというわけではない）。

さて、「小休止」において著者はどんな「寓話」や「空想物語」を語っているのか。それを「要約」すると、「人間存在は表現するものである」という一文になる。

「人間は〇〇するものである」という「寓話」の「〇〇する」には色々なものをあてはめることができる。「直立する」とか「道具を作る」とか「言葉話す」とか、「遊ぶ」というのもあった（著者は「遊ぶ」は例に挙げていないが）。これらは、そもそも「人間」とは何か、「人間」を他の動物あるいは存在と分かつ根拠は何か、という「人間学」であり「人類学」の議論であると、著者はその由来をカントやアリストテレスを題材に語っている。

こうした「人間性の本質的な性格についての諸々の思弁」を著者は「寓話」「人類学的空想物語」と呼び、「実証」は不可能だから、それを否定するのではなく、自らもそこに積極的に加わろうというのである。そして

そのポイントは、先の通り、一つの文に要約できるが、多少前後も含めて引用すると、次のような文章である。

…私はもう一つの空想を提案する。人間存在は表現するものである。
ホモ・ファベル (homo faber 工作する人) ではなく、ホモ・デピクター (homo depictor 描写する人) と、私は言おう。人は表現を作り出す。

傍点は原著 (訳書) のママ。「represent」ではなく「depict」という語が用いられているが、手近な英和辞典によれば「depict」は「represent」よりも堅い語で、詳細に生き生きと描くことを強調」とある。英語のニュアンスの詳細は私にはわからないが、この本のなかでは著者は両者をほぼ同じ意味で使っている。

この一文を本書の要約とみなすことは、必ずしも私の、あるいは文学研究者の恣意的な読み方ではないと思う。なぜなら、本書は「理論と実験」を論じていながら、それをあえて「表現と介入」と称しており、そのことに意味があると考えられるからである。科学的 (あるいは哲学的) 「理論」をあえて「表現」と呼んでいるところに、本書の鍵があるのではないだろうか。その意味でも、この「小休止」とされた一章、そして「人間存在は表現するものである」という一文は詳細に吟味する価値がある。

四 表現

さて、「人間存在は表現するものである」という「空想」「寓話」は、いったい何を言おうとしているのか、そしてそこから何を導き出そうとしているのだろうか。そもそも「人間は〇〇するものである」という「寓話」は、「人間」の「起源」を語るものである。「直立」したときに人間は「人間」になった。あるいは「道具を作」ったときに、「言葉を話し」たときに、……。人間が「表現」したときに「人間」になった、とはどういうことだろうか。著者の文章をたどってみよう。

人は似たものを作る。絵を描き、めんどりの鳴き真似をし、粘土でか

たどり、像を彫り、真鍮を叩きのぼす。それらは人間存在の特徴を示しはじめている各種の表現である。

先の「要約」のすぐ後に続く部分である。もう少し先では、私が表現と言うとき、まず何よりも物理的対象のことを考えている——小立像、彫刻、絵、彫版、それ自体を調べることを、注視することができると述べていて、古代遺跡の壁画とか彫刻のイメージが浮かぶ。

つまり、ここで言われている「表現」(あるいは「描写」) は、言葉によるものではない。「言葉」よりも先に何らかの「表現」を人間は行い、そのとき人間は「人間」になった、という「寓話」「空想」なのである。そして、「人は似たものを作る」というのが、「人は表現するものである」の言い換えとなつている。「似たもの」とは何だろう。普通に考えれば「似たものを作る」ためには前提として「本物」がなければならぬ。どこにかと言えば、もちろんそれは外部にあるのだが、それを知覚し認識し、いわば内面にイメージしてそれを「表出」するのが「表現」だ、ということになるだろう。しかし著者はそうではないと言いたいらしい。まず「何か似たものを作る」のが人間だと言うのである。もちろん知覚や感覚はその前にあるが、それはまだ「人間」の特徴ではない。「人間」は知覚や感覚に「似たもの」をRepresentするときに「人間」になる。その「似たもの」から「本物」についての認識や知識が、そして内面的なイメージ・心象が形成される。著者はそういうプロセスを想像しているらしい。少し先の箇所からまた「寓話」の引用をする。

ホモ・デピクターが粘土の小立像や下手な壁絵について、「本物だ (real)」とか、「そんな様子だ」と翻訳できるような音声を使い始めるところを想像してもらいたい。

そしてこの「寓話」についての解説も引用しよう。

実在、あるいは世界は、なんらかの表現、もしくは人間の言語が存在する以前から存在していた、という異議がでてくるだろう。もちろんである。しかしそれを実在として概念化するのには二次的なのである。

まずこの人間的な事象、表現を作るといふことがある。次いで表現を本物〔実在的〕か、もしくははにせ者〔非実在的〕として、真または偽として、正確かもしくはは不正確として判断することがあった。最後に世界が現れる。

どうだろう。わかったような、わからないような。

とりあえず著者の「寓話」、「人間存在は表現するものである」は、何か物理的・具体的な「似たもの」を作る人の営みに「人間」の起源を見ようとするものである、ということを確認しておく。

五 理論または「公」

しかし、著者の議論、あるいは寓話は決して言葉や言語を置き去りにしているわけではない。先に引用した「私が表現と言うとき、まずなによりも物理的対象のことを考えている……」という文のすぐ後で、こんな風に言っている。

表現とは、壁に描かれたきわめて単純なスケッチであれ——「表現」という言葉を私は拡張して用いるのであるが——電磁気力、強い相互作用の力、弱い相互作用の力、あるいは重力についてのきわめて複雑な理論であれ、外にあつて公になつていゝるものなのである。

本書のテーマが「科学的事実論」であり、科学における「実在」とは何かである以上、当然のことかもしれないが、著者の「寓話」は原始人の営みを通して、最先端の科学理論を寓意しているのである。それにしても古代遺跡の壁画から、一気に最新の科学理論へと、あまりにも飛躍しすぎではないのか。

素朴な絵画や彫刻と「理論」をつなぐものは著者の言葉では「公」である。「公」とはどういうことだろうか。まずは絵画や彫刻が「公」であるとはどういうことなのか。先に引用した箇所ではそれを「物理的対象」「それ自体を調べること、注視することができる対象」と述べていた。別のところではこう言っている。

私が表現と呼ぶものはみな公になつていゝるものである。人はロックの観念に触れることはできないが、われわれの先祖が作り出した最初の表現のいくつかに触れることを制止することは博物館の監視員にしかできない。……すべては公になつていゝる。

博物館の監視員云々は著者独特のアイロニー（ギャグ？）だが、ともかく、「表現」は個人の内面的なもの、観念・思念・心象ではなく、多くの人の目に触れ、共有されるものだと言いたいらしい。その共有のあり方において、人類の先祖の「表現」と科学「理論」が連続するものとして扱われる。飛躍ではない、らしい。

著者は言葉による表現がすべて「表現」ではないと言う。

…公になつていゝる言語的な事象は表現になることが可能である。私が考えていゝるのは単純な平叙文——これはたしかに表現ではない——ではなく、われわれの世界を表現しようと企てる複雑な思弁である。

これもまたびっくりである。「単純な平叙文」は「表現」ではない！さらに、

個々の文ではなく、理論が表現なのである。

一般には単一の文が表現することはない。表現は言語的なものであることが可能ではあるが、言語的表現はたくさんの言葉を用いゝるものなのである。

などと述べられている。このあたり、素朴な原始人？の絵画や彫刻を「表現」とすることと、「言語」はたくさんの言葉を用いゝるある「理論」に達しないと「表現」ではない、ということとが、どうつながるのか、一見別のこと、あるいは逆のことを言つていゝるようみえる。手掛かりは先に見た通り「公」である。「単純な平叙文」や「単一の文」は著者の考えでは「公」になつていゝないらしい。逆に言えば、「理論」とは研究者たちに開かれており検証すべきものとして提示されていゝることで「公」なのだろう。そして「人間」とは「公」であり、内省や心象ではない、と言いたいのかな、と想像する。それはプラグマティズムの格率に沿つた考え方である。ともあれ、著者の「寓話」にはまだ先がある。もう少しついでいゝてみよう。

六 言語起源論

著者の「寓話」は、「人は表現（あるいは描写）するものである」というところから、言葉の誕生、いわば言語起源論へと歩を進めている。「言語起源論」にも色々な空想や寓話がある。労働のためとか、危険を知らせるためとか。著者は「言語は退屈から発明された」という寓話を採用する。

：長い夜を過ごすのに何もすることがない。そこで冗談を言いはじめたのである。言語の起源にかんするこの空想は言葉を人間的なあるものとみなすという大きな長所を備えている。

というのである。私は、文学研究者としてこの空想に加担したいと思う。無文字社会のフィールドワークに基づく川田順造『口頭伝承論』（一九九二 河出書房新社）には、人々が集まって笑い話に興ずる場が報告されていて、それは文学の起源的であり方だと想像されるからである。「言葉」は退屈のぎであり、娯楽であるというのは、「言葉」の始まりが「文学」の始まりであるということにつながる。そして、そこに「言葉を人間的なあるものとみなすという大きな長所」があるというのは、決してロマン主義ではなく、むしろ科学的な議論である。なぜなら、「生きるために必要、あるいは有利だから」言葉が生まれたという仮説は、「人間」以外の全ての生き物にあてはまるはずで、「人間」だけが言葉を持つことを説明できないから。

というわけで、この寓話はとりあえず私には腑に落ちるのだが、次のステップは難解である。もちろんどんな言語起源論も、具体的に言葉が発生する場面を想像しようとすると必ず困難に直面するのだろうが、著者は「人間」をホモ・ルーデンスではなく、ホモ・デピクトルとして定義しているの、それが困難に拍車をかけているように思う。

ホモ・デピクトルが粘土の小立像や下手な壁絵について、「本物だ（real）」とか、「そんな様子だ」と翻訳できるような音声を使いはじめるところを想像してもらいたい。会話が「これ本物、ならばそれも本物」、あるいはもつと慣用的な語法で言えば、「これが実際の様子なら、

そつちも実際の様子だ」というように続けられるとしよう。人は議論好きにできているので、ほどなく他の音声が、「いや、それではなく、こつちのこれが本物だ」ということを表現するようになる。

この個所の前半部は先に「表現」＝物理的な対象物ということの説明としても引用したが、ここでは「言葉」の始まりとしてあらためて読み直す。著者の指示通りに「想像」するのはかなり難しい気がする。ともあれ、「似たものを作る」＝「表現」の次に「本物」（という言葉・概念）が生じ、「どつちが（何が）本物か」という「實在」が生じるということらしい。これをあらためて著者は、

言語活動はそれゆえ、ある表現について言われる、「これ本物」から始まる。

とまとめている。そして、「これ本物」は、

：入り組んだ、すなわち典型的に人間的な思考を、つまりこの木の彫り物はそれが表現しているものについて、ある本物の何かを示しているという思考を表している：

という。「木の彫り物」のところに「（科学的）理論」をあてはめればいいのかだろう。その方がはるかにわかりやすい。しかし、「木の彫り物」と「理論」は交換可能なのか？

ともあれ、これが「人間存在は表現するものである」という著者の「寓話」のほぼ全容である。素晴らしい、と納得する人はあまりいないだろうし、著者もそれを望んでいるわけではないだろう。著者が言いたいのは、「實在」は少なくとも「始まり」ではない、「人間」の営みのなかからどこかで生じてきたものだ、ということ、それを「寓話」として語っている。「寓話」として語るの、それが「寓話」でしか語れないことだからだろう。ウイトゲンシュタンの、というか『論理哲学論考』的に言えば、「言葉で語りえないもの」である（著者は、この「表現」論において、言語が世界に対応するという『論理哲学論考』の「真理の像理論」について「誤っていた」と述べている）。

七 哲学的思弁

「小休止」であり「空想物語」だったはずなのだが、著者は哲学的思弁に深入りしていく。「表現」には常に「様式」が伴うのではないかと、
 「似ている」とは具体的な要素において似ているのであり、ただ単に「似ている」ということはありえないのではないかと、とか。そういう「哲学的」な疑問を呈したうえで、なお「無条件に似ていることがあり得る」と語る。様々な絵や彫刻や細工等について、

私はそれが何に似せたのかを、またその目的を知らないかもしれない。その表現のシステムをちゃんと理解しているわけではないのに、それでも私はそれが表現であることを知っている。

と述べ、

われわれは、何に似せたものであるのか答えられないときでさえ、似せたものと表現を認める。

と言いつつ切っている。そう言われればそんな気がしないでもない。たとえば古代の遺跡から出土する土偶を思い浮かべると、確かにそれは、何を表現しているかはわからなくても、何かを表現している、何かに「似せている」のだという確信を与えることがある。このことを、著者の哲学的思弁のなかから引用すると、

表現をつくるさいに生まれ出る類似性のなまの洗練されていない観念があり、それが人々の材料の加工がより巧妙になるにつれて、何が何に似ているかに注目するさまざまな種類の方法を生み出すと考えるてもばかげてはいない。

ということになる。個別の「類似性」も、表現の様式も、すべては「表現」の後に来る。そして、表現の様式が発展し、さまざまな表現の様式を持つことで、何が「實在」なのかという問題が浮上する。

新しい理論は新しい表現である。それらは異なったやり方で表現し、それゆえに新しい種類の實在がある。そうしたことは實在を表現の属性とする私の説明の単純な帰結である。

ここで著者は、本書全体のテーマである「科学的事実論」について、それは科学理論という「表現」から生じた問題であり、「表現の属性」だと、ひとつの結論に辿り着いているのである。

しかし哲学的思弁はまだ終わらない。あらためてこうした「實在」論の歴史を語っている。デモクリトスの原子論から、ラヴォアジエの化学革命、ハインリヒ・ヘルツの『力学原理』、ピール・デュエム、トマス・クーン、カール・ポパー、エトセトラエトセトラ。門外漢には半分も理解できない。このあたり、そして最後の十ページほどは自分で読んでくれ、としか私には言いようがない。引用したい魅力的なフレーズはここにもいくつもあるが、それを引用する資格が私にはない。それはつまり、そのフレーズ（言説）が「似たもの」であるとは言えるが、何に「似ている」のか、言うことができない、ということである。

ただ、「デモクリトスの原子論」をめぐる議論について、少し私なりの解釈（理解の道筋）を述べておきたい。著者はそれを「デモクリトスの夢想」と呼んでいる。「哲学」的思考の初期において、それは他の「物質の本質」「世界の物質」を説く学説（四大とか陰陽五行とか）と比較して、何ら実証の手立てを持たない点では同レベルであり、「原子論」だけが「科学的」なわけではなかった。しかし、「原子」論は結果的に「科学」の始まりとなった（ように見える）。そして、「原子」が物質や世界の物質・本質、つまり「本当の姿」だという「表現」は、普通に目に見えているものは本当ではない、仮の姿だということと同時に意味しており、これは「哲学」の始まりでもある。少なくともプラトンの「イデア」やカントの「物自体」の始原である。さらに私にとってインパクトがあるのは、「原子」こそが「本当」であるという「表現」から、私たちが普通に見ているもの（世界）は「現われ（appearance）」だ、という説明が生じるという点である。再び著者の言葉に戻ると、

…實在とは異なって、「現われ（appearance）」は徹頭徹尾、哲学的な概念である。それは表現と實在という最初の二つの層の頂上に居を定める。多くの哲学はこの三つ組の順序づけを誤る。ロックはわれわれ

は現われを所有し、次いで精神的表現を形成し、そして最後に実在を
探求する、と考えた。そうではない。われわれは公になっている表現
を作り、実在の概念を形成し、そして表現のシステムが増えるにつれ、
懐疑的になり、たんなる現われという概念を形成する。

この部分が私にとって重要なのは、この稿の最初に引用した私自身の文章
において、言葉による表現の「前」に、「クオリア」があるのか、「イデア」
があるのか、と訝っていたためである。それは単なる思いつきではなく、
それ以外にあり得ないと自分なりに考えたのだが、見て来たとおりの「イ
デア」という「世界の本質」も、「クオリア」という「現われ」も、「表現」
の後に来ると、著者は述べている。

八 文学

『表現と介入』を読んで、いろいろなことを考える。「文学」とは何か、
「表現」とは何か、「言葉」とは何か。そして「似たもの」とは何か。と
りあえず「似たもの」あるいは「似せたもの」について考えてみる。もう
一度『表現と介入』の本文を掲げる。

人は似たものを作る。絵を描き、めんどりの鳴き真似をし、粘土でか
たどり、像を彫り、真鍮を叩きのぼす。

先に見た通り「表現」とは「公」にされたもの、広く公開されたものだ
とされ、原初的な「表現」としては、絵画や彫刻といった形として残るも
のが主にイメージされている。その中で唯一異質なものが「めんどりの鳴き
真似」である。これはおそらく、「表現」は視覚的なものに限定されるわ
けではない、ということを持ち出されたのだろう。しかし、「鳴き真似」
が「表現」であるのなら、身体表現としての「モノ真似」が、絵画や彫刻
よりもはるかに原初的な「表現」ではないか。そして「モノ真似」は少な
くとも「芸能」の始まりである、というのは通説であり、それは「表現」
から「これ本物」という会話が生まれ、「言葉」が生まれたという言語起
源論へも自然に接続する。人々が退屈しのぎに集まり、誰かが「モノ真

似」をして、皆で笑い転げる。「そっくりだ」。こういう寓話的想像は自然
なもののように思う。しかも先述したように『口頭伝承論』のフィールド
ワークはそれがある程度「実証」している。人々が集まって、語り手の定
型的な話に興じる場の存在が報告されているのである。

著者がこうした自然な想像をせずに、

私が表現と言うとき、まず何よりも物理的対象のことを考えている――
小立像、彫刻、絵、彫版、それ自体を調べることを、注視することがで
きる対象のことを。

という限定をしたのは、先に見た通りそれが「理論」の寓話だからだろう。
モノ真似はその場で消えてしまい、「それ自体を調べることを、注視するこ
とができる対象」ではない。「公」ではないのである。だとすれば「めん
どりの鳴き真似」は「表現」ではない。

「寓話」だから、その正否は問題ではない。私が考えるのは「文学」は
「公」なのか、そして「理論」なのかということである。前者については、
イエス。「文学」と呼ばれるものは、「公」に開かれたもので、「私」のもの
ではない。後者については、迷う。「理論（という表現）」が、「実在」や
「世界」を生み出すとすれば、「文学」（個々のいわゆる文学作品、テキス
ト）もまた広義の「理論」である、と言ってもいいような気がする。こ
れはつまり、リチャード・ローティの言う「科学を文学の一分野とみな
す」（『プラグマティズムの帰結』原著一九八二 ちくま学芸文庫）ことと
つながるようにも思う。

ただ、そのとき「公」とは何か、という問いが浮上する。科学理論にお
ける「公」とは、研究者共同体であり、そこで共有され検証され一定の合
意に至ることで「実在」や「世界」を持つことになる。これはパースのプ
ラグマティズム以後、あるいはクーンのパラダイム論以後の基本的な理解
だと思う。「文学」の「公」はそれとは異なる。「文学」は研究者といった
特定の資格を必要としない（可能性として）広範な読者の共同体によって
成り立つ。母語でない「文学」を共有することもあり、その意味で「言
葉」すら超える。必然的にそこで行われるのは検証や合意とは異なる何か

であり、それをあらわす語として思い浮かぶのは「解釈」である。そこで反転して問うことになる。「理論」は「解釈」されるのか。もちろん、とりあえずはイエスである。野家啓一『科学の解釈学』（講談社学術文庫）という名著がすでにある（『表現と介入』とほぼ同時期に書かれている）。ただそれが「文学」の場合と同じ「解釈」なのかどうか。

九 介入

新たな問題にぶつかってしまったようだ。科学理論は検証され合意への道を歩もうとするが、「文学」はそれが「理論（世界を表すもの）」だとしても、検証や合意ではなく「解釈」へ向かい、その連鎖を歩む。だから「文学」は「科学」ではない、とは私は思わない。私は「文学」は「科学」であると考えており、それはつまりプラグマティズムの言う「探究」であるということだが、「探究」の手続きが自然科学とは異なるのだと思う。そして手続きとは、要するに「言語ゲーム」で、自然科学の「言語ゲーム」があるように「文学」にも「言語ゲーム」がある。「言語ゲーム」とは、実践であり生活である。

『表現と介入』の半分は「介入」について述べている。「小休止」の後に、門外漢にも興味深い「介入」の議論がある。それは文庫版解説によれば、「実験活動はそれ自身の生活をもっている」の一文に要約でき、「…実験という活動を中心に据えて、科学哲学上の問題を考えていこうという新しい流れを生み出した」のである。そしてそれは科学哲学の専門家ではない私にとっても、思考の「新しい流れを生み出した」。私なりに「介入」について本書から示唆されたことを述べておきたい。

簡単に言えば、著者は「実験」は「理論」を検証するため（だけ）に行われるのではないということを書き述べている。「理論」は「表現」であり、そこから「実在」や「世界」や「現れ」が生み出されるが、「実験」はその検証や追認ではなく、そこから独立、自立した行動・活動である。そうした実験活動を「介入」と著者は呼ぶわけだが、「理論」に「介入」

するわけではない。では何に「介入」するのか。著者は「あなたが電子を吹きかけるならば、それは実在する」と述べている（そしてそれが本書の「要約」となる）。つまり「介入（電子を吹きかける）」できればそこに「実在」はある、ということらしい。「表現」が「実在」に先行していたように、「介入」も「実在」を前提とはしない。あらかじめそこに「理論」的に「表現」された「実在」がなくても、「世界」がなくても、「介入」は人の営み、生活としてある、という感じ。うまく説明できないが。

「文学」つまり「解釈」もまた、必ずしも「表現」ではなく、「介入」なのかもしれないと考えてみるが、これはまだほとんど「夢」の域を出ない。次の課題としたい。

十 余説、または、本説

具体的な「文学」からは遠く、その意味で迂遠なことばかり述べてきてしまったが、私はあくまでも自分を「文学研究者」だと意識しており、常に「文学研究」のことを考えている（もちろん四六時中ということではなく、こうした思索において）。最後にその一端を示して稿を閉じたい。

「表現」は「似たもの」であるという寓話は、いろいろな点で示唆的である。たとえば物語・小説などのいわゆる「主人公」を考える際に有効な視座のように思う。「主人公」はしばしば「モデル」との関係で把握される。その際、私たちはどうしても「モデル」の存在を前提として、それと「主人公」がどう似ているのかを論じがちである。あるいは、いろいろな「モデル」があつて、それを参照しながら「主人公」が創られた、と。そうではない、と考えてみる。「表現」としての「主人公」があつて、「モデル」はその後で生じてくる、ということである。私は以前、西鶴の『椀久一世の物語』という作品を論じ、それが「椀久」という「実在」人物を「モデル」とするという通説を批判し否定した（『椀久一世の物語』頌—「モデル小説」論を超えて）前掲拙著所収）。その際に私はさまざまな「実証」的な手続きを踏んだ（『モデル』の没年を検討したり）のだが、

いま考えるとそれは原理的に否定することができたし、その方が本質的な議論ではないかと感じる（やってみないとわからないが）。

なお、いわゆる近代においては「主人公」の「モデル」は「作者」と理解されることが多いが、その「モデル」論を否定するというのは、いわゆる「作者の死」とは異なる議論である。「作者」は死んではない。ただ「表現」の後に生まれるのである。それは必ずしも不要のものではないかもしれない。

また、いわゆる風景描写的な「文学」的叙述について、「風景」が先にあるのではなく「表現」が「風景」を生み出すと考えてみる。あるいは「記憶」や「意識の流れ」を「表現」した「文学」（私の頭にあるのはたとえばプルーストなのだが）について、「表現」が「記憶」や「意識」を生み出すと考えてみる。それでどうなるのか、これもやってみないと、あるいはどうやればいいのかもまだわからないが、「文学研究」とは何かということをかかなり根底的に考える契機にはなるように思う。

Reading “Representing and Intervening” by Ian Hacking

Seishi KAZAMA

This essay will examine Ian Hacking's “Representing and Intervening; Introductory Topics in the Philosophy of Natural Science” (Chikuma Gakugei Bunko, 2015, original work, 1983), a masterpiece of philosophy of science, from the standpoint of literary studies. In the book, there is an “allegory” that “human existence is homo depictor”, and I will consider the meaning of this “allegory” according to the narrative in the book. Although it is a presentation of a thought process and has no conclusion, it may touch on a fundamental issue of literary studies.

Key Words : representation, Ian Hacking, “Representing and intervening”

